

詩人の想像力とセクシュアリティ、遺伝論

トマス・ハーディの「夢見る女」を読む

吉田郁世

序

トマス・ハーディの「夢見る女 (An Imaginative Woman)」は、一八九三年の夏に執筆され、翌年四月に『ペル・メル・マガジン (Pall Mall Magazine)』に掲載された短編作品である。この物語はハーディのお気に入りの作品であり、ヒロインにはハーディの友人フローレンス・ヘニカー夫人 (Florence Henniker) のイメージが投影されている⁽¹⁾。ハーディは、ヒロインが詩人にプラトニックな恋をして空想に耽る様子と、妻や母としての現実の生活が容赦なく介入してくる様子を描写している。ヒロインのエラ・マーチミル (Ella Marchmill) は、あこがれの詩人ロバート・トルー (Robert Trewe) が間借りしている家に偶然滞在することになり、トルーがしばらく部屋を留守にしている間、彼の私物を発見したり、女家主から彼の様子を聞き出すことで、トルーに対する思いをいっそう強めていく。しかし、その思いとは裏腹に、エラとトルーはすれ違い、トルーは自殺を遂げてしまう。絶望したエラは四番目の子どもを出産して亡くなるが、奇妙なことに、その子どもには一度も会ったことのない

いトルーの面影があることが明らかにされ、物語は幕を閉じる。

一九一二年、ハーディは、当初『ウェセックス物語 (Wessex Tales)』に収録されていた「夢見る女」を『人生の小さな皮肉 (Life's Little Ironies)』に収録し直す理由として、「この物語が『身体の可能性 (a physical possibility)』と『生き生きした空想 (vivid imaginings)』とが結びつくという「自然のいたざら (a trick of Nature)」をテーマにしており、同時代の都会を描いた『人生の小さな皮肉』の趣向に合っているためであると述べている(2)。ハーディのいう「自然のいたざら」とは、実際に関係をもったことのない男性の面影をもつ子どもが誕生し、それがきっかけとなって夫が妻と詩人とが不倫関係にあったと信じ込んでしまうという結末を指している。ハーディは、ヒロインの「生き生きとした空想」によって「自然のいたざら」が起きたと述べているが、空想によって遺伝的要素が変質してしまうというのは、一体どうしたことなのだろうか。また、この展開は当時物議を醸していた遺伝の問題とは、どのような関わりをもっているのだろうか。

先行研究では、「夢見る女」とヘニカー夫人とのつながりや、長編小説のテーマとの関連性が取り上げられることはあるものの、ファンタジー的要素の強い作風のためか、当時のディスコースと照合して遺伝や血統について論じているものは少ない(3)。本稿では、満たされない結婚生活を送るヒロインの豊かな想像力によって、子どもの遺伝的要素がいかに変質するに至ったのかについて、ヒロインの気質やセクシュアリティに注目しつつ、考察してみたい。また、当時の遺伝に関する学説、物理学・心理学とのつながり、そしてこの作品と前後して執筆されたハーディの長編小説における遺伝というテーマの扱いにも目を向けることで、想像力と結びついたセクシュアリティや「身体の可能性」について検討してみたいと思う。

一

ヒロインであるエラは、ヴィクトリア朝の中流階級における抑圧された女性像を体現している。エラは、「家庭の天使」として夫や子どもに献身的になることができず、物語のはじめから、読書に耽ることと自己陶醉しており、三人の子どもたちは乳母

と一緒に彼女から遠く離れた場所にいる(一一)(4)。エラと夫ウィリアム(William)は、内面の違いにさえ目をつぶっていれば、社会的・家庭的には特に問題はなく、性的にも親密な関係にある。夫が鈍に関心をもち、妻の方は文学に傾倒しているという点で、この二人はヴィクトリア朝の中流階級に典型的なタイプの夫婦であるといえる。しかし、外の世界にはけ口を求めることのできる夫とは異なり、エラが感情のはけ口を外の世界に見出すことは許されていない。エラは、妻として、また母として、家庭を守るといふ役割を果たしてさえいなければならないのである。夫の氣質が「鈍重(Lymphatic)」に近いと表現されているのに対して、エラの氣質は「神経質(nervous)」で「多血質(sanguine)」と表現されている点に注目すると、エラは活動的であることが向いている快活な氣質であるにもかかわらず、家事と育児という彼女にとっては退屈な仕事に束縛されていることが明らかになる。

エラに許されているのは、空想の世界に不満のはけ口を求めることである。エラは、結婚が自分にとって何を意味するのかよくわからないまま、愚鈍で洗練されていない男の妻となってしまう自分の身の上を哀れみ、「想像の世界、白日夢、夜半の溜め息」(一二)に浸っている。ハーディは、エラがまるで空想の世界の住人であるかのように描写している——「彼女は小柄、そしてほっそりとした優雅な身体つきをしており、身のこなしも軽やか、というよりむしろ弾むような感じだった」(一二)。エラの生き生きと輝く黒い瞳は、満たされることのない情熱を表わしており、彼女の男性の友人や当人自身にも心痛の種になることがある。エラは、フローベールの小説『ボヴァリー夫人』のヒロイン、エンマ・ボヴァリーのように知的かつ情熱的な女性であり、物質的な文明社会や凡庸な夫との単調な結婚生活に不満を抱いている。また、エラの現実への抵抗や自己破壊的な様子は、イブセンが表現するヒロインたちと共通しているともいえる(5)。エラの情熱は結婚生活の倦怠に起因するが、夫婦間の愛情が「気まぐれな友愛」(一七)に変わるといふことは、ヴィクトリア朝においては当然の成り行きであった。語り手は、実利にばかりとらわれているヴィクトリア朝の社会において、夫婦間の愛情が急速に冷めていくのは必然であるとし、そのためにエラ的情熱がはけ口を求めてやまない状態にあったと述べている(一七—一八)。

文士の一人娘であるエラは、「決まりきった雑多な家事や、個性のない夫のために子どもを生み、育てるといふ憂鬱」(二四)

によって封じ込められた情動を解き放つために、詩作を始める。一九世紀の多くの女性作家のように、「ジョン・アイヴィ (John Ivy)」という男性のペンネームを用いて詩を書くことでエラが求めていたのは、ヴィクトリア時代の家庭の女性には得られないもの、すなわち詩人としての社会的な地位である。商人の妻であり、三人の子をもつ母親であることを読者が知れば、「誰も彼女の靈感を信じてはくれないかもしれない」(一五) と思ったエラは、ペンネームを使用することで男性のふりをしなければならなかった。しかし、エラの「弱々しい」(一五) 詩は魅力に乏しく、男性優位の文学の世界ではエラは詩人として成功できない。加えて、エラは、妊娠したために詩作を断念せざるを得ないという、生物学的に不利な立場に追いやられる。その後もエラは、「単なる人類の増殖者」(一五) に留まってはられないと詩作を再開するものの、満足のいくような作品を生み出すことができない。さまざまな抑圧から豊かな想像力を解き放とうとする試みがまったく成功しないために、エラのフラストレーションは増大する一方である。

対照的に、ロバート・トルーは既に成功を収めている詩人である。トルーは、エラと同じように感情のほとばしりを詩で表現しているのだが、トルーの詩は「情熱に溢れ」「豊穡」(一五) であり、エラの詩よりも「はるかに力強い」(一五)。エラはトルーの作品を模倣しようとするが、うまくいかずに泣き出す。偶然にも同じ事件を題材にした二人の詩が並べて掲載されるということがあって以来、エラはトルーに関心を寄せていた。今こうしてトルーの仮住まいに滞在するにあたり、彼に対する興味は執拗なものとなり、女家主のフーパー夫人が伝えたトルーの人柄に夢中になる。内面に沸き立つ情熱のはけ口を見つけたエラは、理想化したイメージをトルーに投影し始める。エラは、壁紙に殴り書きされたトルーの文字に「こみ上げてくる愛しさ、好奇心」(二六) を隠し切れなくなり、「すぐ附近にいながら近づきたい師匠」(二七) であるトルーの「個人的な要素」(二七) に惹かれる。エラを操っているのは「本能」(二七) であり、ハーディの作品における「本能」は、人間が逃れることのできない運命の力と深い関係をもっている。

エラがトルーの「個人的な要素」に惹かれているというのは、彼女がトルーに対して性的な興味をもち始めていることを表わしている。エラの子どもたちは、かくれんぼをしていてクローゼットからトルーの防水コートを引きずり出す、それを見つけ

たエラは、トルーに対抗できるような能力が授かるかもしれないと思ってコートをもと、付属している帽子をかぶる。ユダヤの予言者エリアのマントのようだと瞳を潤ませるエラだが、これが純粹に知的好奇心による行動だとは言いがたい。エラは、トルーのコートを通じて彼の心臓を感じ、帽子を通じて彼の頭脳を感じている。身体を通じてトルーを感じるというセクシユアルな行為のために、エラは自分の「弱さ」(一一八)を痛感し、気分が悪くなる。そこへ夫が入ってきて、エラは現実の世界へと連れ戻される。

トルーの所有物を目にする機会には恵まれているが、エラはトルーに会うことができない。トルーが家に立ち寄るというので、会えることを心待ちにしていたエラだったが、結局トルーは現われず、エラは大きなショックを受ける。次にエラの期待が膨らんだのは、海に出た夫が翌日まで帰れないという知らせを聞き、「何か魂の沸き立つことに巡り逢えそうな予感」(一二〇)を静かにかみしめた時だった。その晩、寢室に一人きりになったエラは、王族公爵夫妻の写真の後ろに隠されていたトルーの写真を見つめ、まるで彼と性的に親密になったかのようにエクスタシーに浸る。エラは、初めて目にしたトルーのイメージに大きく魅了される——「エラはとびきり低い、豊かな、優しい声で呟いた——『あなたでしたか、あれほど何度も私を無惨にうち負かしたのは！』」(一二一・傍点は原文のもの)。涙ぐみながら写真に口づけしたエラは、トルーこそが自分の最愛の人であり、夫よりも自分に近く、親密な存在であると信じるようになる。豊かな想像力のために、エラはその場にトルーがいて、性的な関係を結ぼうとしているかのような錯覚にとらわれる。壁紙にあるトルーの走り書きに顔を近づけたエラは、トルーの「温かく優しい息づかいそのもの」(一二二)が「頬に吹きつけてくるかのよう」(一二三)に感じる。エラが未だ出会ったことのないトルーの幻影に酔いしれる様子は、次のように描写されている。

そして今、消えてしまふような詩想をのがすまいとして、詩人が腕を横たえたその場所にエラの髪がふりかかっていた。彼女は、詩人の唇の上で眠ろうとしていた。彼の本質そのものに浸されて、身体中にその靈魂がエーテルのように滲みわたって

夫不在の寢室においてあたかも不貞行為を働いているかのようには、エラは全身でトルーの「本質そのもの」を感じ、その「靈魂」を受け止めているのである。しかし、トルーのコートや帽子を身につけ、身体を通じて彼を感じ取ろうとしていた時と同様に、帰るはずのない夫が突然戻ってきたので、エラは慌ててトルーの写真を枕元に隠す。夫は優しさを見せ、「今夜はお前のそばにいたかったんだぞ」(二三)と言ひ、彼女の身体を求めてくる。エラの心はあこがれのトルーと一緒にいたいと強く願う一方で、彼女の身体は妻としての義務を果たすために現実の世界に戻らなければならなかった。

二

エラは、トルーが滞在しているという近くの寒村まで彼を探しに出かけるが、徒勞に終わる。トルーに会いたいというエラの意思に反して、トルーは彼女にとって実際に目にもできないならば、近づくこともできない男性のままである。どれほど求めても出会うことができないために、エラの満たされない欲望は増大し続ける。

理想の恋人を追い求めるといふテーマは、想像力とプラトニックな愛の関係を扱ったハーディの長編小説『恋の靈 (The Well-Beloved)』(一八九七)のテーマと一致している。『恋の靈』では、彫刻家ジョセリン・ピアストン (Jocelyn Pierston) がいとこのエイヴィス・カロー (Avice Caro) を最愛の恋人と見なしているが、それは彼女が亡くなり、もはや近づくことのできない存在となってからのことにすぎない。ピアストンは、エイヴィスのイメージに固執し、エイヴィスの娘や孫に恋をするのだが、決して結ばれることはない。ヒリス・ミラーは、ピアストンにとっての最愛の人とは、実は自分自身の姿、女性に変化した分身であると論じている⁽⁶⁾。『恋の靈』において、ピアストンが自己愛的な恋を自覚していたように、「夢の女」においても、トルーがエラの分身であることが暗示されている。寢室の場面において、エラは「お会いしたことはないけれど、でもウィルよりも本当の私には身近な人、はるかに本心を通じ合える方だわ」と呟いている(二二)。フーパー夫人によれば、トルーは「夢見が

ちで、孤独好き、少し沈んだところ」(二三)がある男性である。「まるで稲妻のように」(二〇)きらめく瞳をもち、詩作に情熱を注いでいるという点を考慮しても、トルーはエラが男性に変化した分身であると捉えることができる。

クリスティン・ブラディは、この物語のプロットが「感傷小説や劇の伝統から注意深く入念に作られたものであり、徐々に高まるロマンティックな期待は、幸福の達成ではなく、落胆と後悔で満たされる」と指摘している(二)。現実の生活に対する嫌悪感やトルーに会えないことで生じる欲求不満から、エラは最愛の人トルーにますます固執していくが、トルーと出会うことはできない。エラに許されているのは、ジョン・アイヴィという男性詩人のふりをしたままで、トルーと文通することのみである。

トルーを自宅に招待するという機会に恵まれ、浮き足立っていたエラだが、門の前まで来ていたトルーは訪問を取り止めてそのまま姿を消す。もう少しで会えそうなのに会えないという設定の反復は、手に負えないまでに欲望が増大していく過程を表わす一方で、自己愛は決して成就することはないことを示している。エラは、他者であるトルーとの同一化によって自己同一化をはかろうとするのだが、結局失敗するように予め定められている自己同一化は達成されることがない。

トルーが突然訪問を取り止めたのは、彼の詩が書評で激しい非難を浴びたからだった。彼の詩は、「読み手の好みによってはどこかエロティックで激しすぎるところがある」(二七)のために、痛烈に批判されたのである。物事を神経質に考えすぎるトルーは、書評の内容に動揺し、自宅でピストル自殺を遂げる(二八)。トルーの遺書から、最愛の人に巡り逢うことができないという落胆が自殺の原因となったことが明らかにされる。

もしも僕が、母か、姉か妹、あるいは優しい心を捧げてくれる女友達にでも恵まれていたならば、僕はそのまま生き長らえてゆくことに価値を見出せたかもしれない。長い間、僕はそんな手の届かぬ女を夢に見て待ち望んでいた。そしてこの、未だ見出しえぬとらえ難い女が、僕の最後の詩集に靈感を与えてくれた。その女性は想像上の存在にすぎない。世間の一部ではなく取り沙汰されたけれども、あの表題の陰に実在の女性などいるわけがない。その女はついに最後まで姿を見せず、逢うこともなく、僕のものにもならなかった。この点は、誰か実在の女性に僕につれなく、あるいは傲慢な仕打ちをしたために死ん

だ、などと責められないように、特に記しておきたい(二二八)。

「母か、姉か妹」が理想の女性であるという点から、トルーもまた、エラのように恋人の中に潜む自身を愛していたと推測できる(9)。皮肉なことに、トルーの詩集のタイトルは『見知らぬ女に捧げる抒情詩集(Lyrics to a Woman Unknown)』(二八)だった。

芸術家としてのトルーとピアストンには、最愛の人を追い求めることからインスピレーションを得て、芸術性の高い作品を生み出しているという共通点がある(10)。「想像上の存在にすぎない」理想の女性から「靈感」を得たことで、トルーは詩集を完成させることができたのである。しかし、最愛の人がいつまでも目の前に現われることのないことに対する失望感はあまりにも大きく、トルーは死を選ぶ。芸術家の自殺という設定は、『恋の霊』にも見られる。当初の設定では、ピアストンは最愛の人と結ばれないことに耐え切れなくなって自殺を図るが、未遂に終わるとなっていた。こうした鬱状態と自殺願望は、ハーディが描く芸術家の登場人物たちに当てはまる要素である。彼らは、厳格な唯美主義や理想の女性を執拗に求める行為から、しばしば憂鬱で傷つきやすくなるのである。トルーは、自分の鬱状態を和らげることのできる最愛の人に出会えないことを嘆きつつ死を遂げる一方、一八九七年版『恋の霊』におけるピアストンは、エイヴィス・カロの孫娘を得られなかったことが原因で病気になる。急速に老け込んでしまう。芸術家による最愛の人の追求は、創造力を高揚させるようなインスピレーションを与える一方で、自己愛的要素が強いためにその恋は決して成就せず、結果として精神に異常をきたす危険性を孕んでいるのである。

トルーの死を知ったエラは、狂わんばかりの悲嘆に暮れるが、まだ彼に執着し続ける。トルーの写真と少しばかりの遺髪を送ってくれるようにフーパー夫人に依頼した際、葬儀の日取りを知ったエラは、誰にも告げずにトルーが葬られた墓を確認しに行くという「常軌を逸した行動」(二三〇)をとる。墓の前で泣き崩れていたエラの前に現われた夫は、「結婚して、三人の子どもがいて、もうすぐ四番目が生まれようとしているようなお前みたいな女が、死んだ恋人の墓の前で落ち着きを失っているなんて、あまりにも馬鹿げているじゃないか!」(三二一)と叱るが、夫の登場でエラが現実の世界に呼び戻されるといことはもはやな

い。出産が近づくにつれて、エラは「いつ見ても悲しげであり、物憂げで、やつれ果てていると言ってもいいほど」(三二)になり、死に際に夫に次のような告白を残す。

自分でも何に取り憑かれていたのか、わからないのよ——どうしてあんなふうにな、夫のあなたのことを忘れることができたのか！でも、とにかく私はおかしくなっていたの。ずっとあなたが思いやりに欠けていて、私のことなんか眼中にないような気がしていたのよ。あなたは頭のレベルが私に及ばないけれど、でも彼ならば私と同じ、いいえ、それ以上と思ったりして。きっと私、誰か愛してくれる人というより、もっと私のことをわかってくれる人がほしかったのよ——(三三)

トルーが「母か、姉か妹」のように自分に近しく心優しい女性を求めていたように、エラもまた、自分と同じように知的で理解のある男性像をトルーに投影していたのである。満たされることのない自己愛的感情を抱き、フラストレーションを溜めていた二人だが、トルーは現実世界の疎ましさに耐え切れず死を選び、エラは妻や母としての役割から逃れるために命を落とさなければならなかった。

三二

理想とする最愛の人に出会えないために欲求不満となり、情け容赦ない現実によって心を傷つけられて精神を病み、死に至るという点では、エラとトルーの人生は類似しているようにみえる。しかし、詩人としてある程度の成功を収めて亡くなったトルーに対して、エラの詩が世の中で認められることはなく、またエラ自身、立派な妻・母として認められていたわけでもない。エラの死の直接の原因がトルーに出会えなかったことで生じた欲求不満の高まりと出産による身体への負担の増大であるという点に着目すると、エラの鬱状態はセクシュアリティや生殖機能と深い関わりをもつと考えることができる。対照的に、トルーの鬱

状態は、芸術的創造力を高める役割を果たし、生殖とは無縁である。つまり、エラとトルーの鬱状態は、性的差異を帯びたものとして表現されているのである(11)。こうした性別による精神異常の差異化は、『恋の霊』にも現われている。クリスティン・ブラディによれば、ピアストンの神経衰弱とエイヴィスの娘であるアン・エイヴィスのヒステリックな兆候とが対照化されている。『恋の霊』では、「ヴィクトリア時代のジェンダー理論における、心と身体の相反を示す基準」が保持されているのである(12)。また、エラの感情的な様子や身体性が繰り返し描写されているのに対して、トルーは芸術家としての気質や精神性が強調されている。この違いもまた、男性と精神性、女性と身体性をそれぞれ結びつけ、男性を女性より優位に置くという近代の二分法に従っているといえる。

しかし、この性別による差異化によって、エラの想像力が何の結果も生み出さなかったわけでない。「夢見る女」で注目すべきなのは、エラの豊穡な想像力が「自然のいたずら」と結びついてトルーの面影のある子どもが誕生したという奇妙な結末である。トルーが自殺を遂げても、エラはまだ夢が実現すると密かに思っていたようである——「可能性はすべて尽きた、逢う夢はむなしく消えた。それでもなお、実現を見ることはついにあり得ぬこととなったのに、夢幻のうちに、彼女の目には今も見えるかのようにだった」(二九)。エラは、トルーと現世で出会うことが不可能となっても、夢見ることをやめようとはしなかったのである。エラは、「自分でも何に取り憑かれていたのかわからない」「おかしくなっていった(amorbid state)」と死に際に告白しているが、この状態を「病的な状態」と捉えることができる。ハーディによれば、この「病的な」状態は、医者や研究者の間ではよく知られている症状であり、この症状こそがエラの「生き生きとした空想」と「身体の可能性」とを結びつけ、「自然のいたずら」を起こしたと考えてよい(13)。この「自然のいたずら」に気づいたのは、エラの夫であり、その様子は以下のように描写されている。

マーチミル氏は、思い当たることがあって、その写真と遺髪をしばらくじっくりと見つめていた。次に妻の死とひきかえに生まれてきた、今では騒々しくちよこちよこ駆け回るようになった男の子をつかまえてきて、膝の上に抱え上げると、その頭

部に遺髪をあてがった。また、遺影を後方のテーブルの上に立てかける。こうすれば両方それぞれの目鼻立ちを入念に引き較べてみる事ができる。世に知られる不可解な自然のいたずらでもあろうか。そこには紛うかたなく、エラがついに見えることとなかった男そっくりの痕跡がはっきりと認められた。詩人の顔に特有の夢見るような表情が、まるでのり移ったかのよう
に幼児の顔にあり、しかも髪の毛も同じ色合いだ(三二)。

一度も接触したことのないトルーの面影が、エラの子どもの顔にはっきりと認められるというのは、一体どうということなのだろうか。この子どもがエラとその夫の間に生まれたというのは紛れもないことであるのにもかかわらず、生物学上の父が無視されるような結果になるというのは一体何を意味しているのだろうか。

この物語において表現されている「自然のいたずら」による不可思議な遺伝は、明らかに当時の遺伝論に反するといえる。一九世紀末には、フライブルク大学の細胞学研究者であり、ダーウィンの熱烈な支持者であったアウグスト・ヴァイスマン(August Weismann)が生殖質論(germ plasm theory)を提唱していた。ヴァイスマンは、動物の発生・遺伝・進化の理論研究を行い、生殖質は親から子への連続性をもつが、体質の変異は遺伝しないと主張し、獲得形質は遺伝するというラマルクの遺伝論の信念を批判した。ヴァイスマンの説によって、進化において環境が占める役割は影を潜め、対照的に遺伝の役割が強調されることとなった。遺伝によって人生が支配されるという悲観的なこの説は、「環境改善の論理的基盤を傷つけただけでなく、個人の自立性をも脅かしたのである」(14)。

一八九〇年の後半、ハーディはヴァイスマンの『遺伝論(Essays on Heredity)』を読むことで、血統に関する科学的な知識を身につけている(16)。そして、遺伝に大きな関心を抱いたハーディは、「夢見る女」の執筆と前後して、長編小説『ダーバヴィル家のテス(Tess of the d'Urbervilles)』(一八九一)や『日陰者ジュード(Jude the Obscure)』(一八九五)、『恋の霊』を出版し、遺伝という科学的な要素に翻弄される登場人物たちを描いている。これらの小説において、ハーディは自身の宿命論と結びつけることでヴァイスマンの遺伝論を効果的に用いているといえる。それでは、「夢見る女」における遺伝は、何をもとに考え出さ

れたものなのか。クリスティン・ブラディは、ハーディがヴァイスマンの生殖質論のことを知りながら、「民間伝承や一九世紀の医学で信じられてきたこと」、すなわち、「胎内にいる子どもの身体的特徴は、両親の過去や現在の経験に影響される可能性がある」ということの方を選択したと論じている(16)。つまり、「夢見る女」は、『ダーバヴィル家のテス』や『日陰者ジュード』、『恋の霊』と同じくヴァイスマンの説に端を発しているが、遺伝の決定論に完全には影響されることのなかった作品として捉えることができる(17)。

四

ここでもう一度、エラが寝室でトルーの写真を眺めていた場面を考察してみたいと思う。マーティン・レイは、この場面には何度も手が加えられていることを指摘している(18)。草稿にはあるが最終的には削除されている箇所を見ると、ハーディは当初、この場面を非常にエロティックに表現していたようである。草稿の削除された箇所には、エラがトルーに性的な関心を寄せていたとあり、ベッドで写真を見つめていたエラは、トルーと一緒にいるような気がして罪の意識を感じたとも表現されている。そして、最も重要なのは、先に引用したエラがトルーの「本質そのものに浸されて、身体中にその霊魂がエーテルのように滲みわたって」いたという箇所である。この「トルーの霊魂が滲みわたる (permeated by his spirit)」が、「トルーと姦通する (permeated by him)」となっていた痕跡が草稿には残されている。ハーディはこれを修正し、空想の中でエラとトルーが肉体的な関係をもったとする代わりに、エラの肉体がトルーの霊魂に浸されたと変更してはいるが、この寝室の場面では、エラが自己愛的なモデルであるトルーにエロティックな欲望を感じ、実際に姦通を働いたように空想している点に変わりはない。

この空想の中での最愛の人との逢瀬をきっかけに、エラのトルーに対する関心は増大していき、結果としてエラはトルーに「病的な」までに執着するようになる。トルーが自宅を訪問してくれなかった時、自制がきかなくなったエラは、「むやみやたらに」(二七)子どもたちにキスすることで感情を発散させようとしたが、「どの子ども顔つきが父親に似て無骨であることに気づき、

嫌になるほどとましく」(二七) 思う。エラは、自分を理解してくれることのない夫と子どもたちの容姿が似ていることに我慢できず、嫌悪感すら覚えているのである。したがって、生物学上の父である夫ではなく、想像上の恋人であるトルーが、今度産まれてくる子どもの父親であってほしいという願望をエラが抱いていたとしても、不思議はない。実際に姦通を働いたように空想したこと、そして子どもの父親がトルーであってほしいという願望を抱いたことによって「身体の可能性」が刺激され、最終的にはエラの欲望は遺伝の力に打ち勝ったのである。

さらに注目する必要があるのは、「エーテルのように」という表現である。エーテルは、一九世紀以前の物理学において、力・光・熱等が空間を伝わるための媒体として仮想されていた物質である(19)。エーテルが空間における力の媒体となるのであれば、トルーと関係結びたいというエラの欲望により、トルーの「靈魂」を伝達する媒体としてエーテルが機能し、その結果エラの「身体の可能性」が呼び起こされたと考えることができる。この場面より前には、エラがトルーの仮住まいを訪れたのは「奇妙なめぐり合わせ (an odd conjunction)」(一五) が原因であり、エラがトルーに惹かれるのはトルーの「磁気を帯びた魅力 (the magnetic attraction)」(一七) が原因であることが示されている。つまり、エラとトルーとの関係は、磁気 (magnetic)(20) や引力 (attraction) による接近や結合 (conjunction) という物理学的な比喩として捉えられているといえる。したがって、エラの子どものトルーの面影が遺伝するというファンタジーは、多分に神秘主義的ではあるが、一九世紀における物理学の視点から捉え直すことが可能であるために、まったく根拠がないとはいえないのである。

それまで哲学や生物学を基盤としていた心理学が、物理学におけるエネルギーの概念と結びつき、科学的な要素を帯びてきたのは、一九世紀後半のことである。外的な刺激を物理量として客観的に測定した上で、内的な感覚との対応関係を明らかにしようとする試みは、やがて実験心理学へと発展し始めた(21)。また、人間の精神を物理学的に測定しようとする動きは、さまざまな心的現象をエネルギーの概念から説明しようとしたフロイトの精神分析へとつながっていった。満たされない欲望が神経症の原因となること、そして個人のコンプレックスが宗教・文化・社会制度を生み出す要因であることを唱えたフロイトだが、こうした人間の宿命論は、盲目的な生への意志の存在を示したショーペンハウアーの説にも顕著に見られる。ハーディの「夢見る女」

のヒロインは、「本能」に従った結果、命を落とすこととなったが、この「本能」は盲目的な生への意志との関係が強く、満たされない欲望がヒロインの身体に作用するという描写は、後にフロイトが指摘するリビドーへとつながっていくものとして捉えられる²²⁾。したがって、「夢見る女」は、生物学的な遺伝論よりも、エネルギーの概念から人間の身体や精神を説明していこうとする心理学および精神分析学との関連が深い作品であるといえる。

結論

「夢見る女」は、抑圧されたヒロインの欲望と「身体の可能性」が結びついたことによって、実際に肉体関係をもつことなく、自分の分身である異性の身体的特徴をまったく別の男性との間にできた子どもにも遺伝させることで、自己愛的なモデルに対する成就不可能な恋愛感情を満たすというファンタジーを扱った物語であるといえる。この女性の妊娠・出産を中心としたファンタジーが、性差の強調を行うことで女性に不自由を強いていた生物学の分野で唱えられていた遺伝論と対立するというのは、非常に興味深い点である。また、この作品に物理学の視点が取り入れられている点や、ヒロインの欲望や想像力の描写が、物理学で指摘されたエネルギーの概念を取り入れた心理学やフロイトの精神分析学の発達と呼応していることを考慮に入れると、ハーディの表現する「遺伝」というテーマに新たな側面が見受けられることが明らかになるといえる。

註

(1) ハーディとヘニカー夫人は、一八九三年五月に訪問先のダブリンで出会い、その後、頻繁に文通を交わす仲になっている。

ヘニカー夫人は十冊の小説を出版しており、ハーディと共作した短編作品も残されている。「夢見る女」のヒロインの印象

- 的な瞳は、ハニカー夫人の瞳と共通点をもつほか、作品の舞台やヒロインが慕う詩人の苗字にも、夫人との関係が見受けられる。詳しくは Martin Ray, *Thomas Hardy: A Textual Study of the Short Stories*. (Hants, England: Ashgate, 1997), 171 を参照のこと。
- (2) New Wessex 版 *Life's Little Ironies* の序文 (一九二二年四月) を参照のこと。
- (3) Kristin Brady, *The Short Stories of Thomas Hardy: Tales of Past and Present*. (London: Macmillan, 1982), Tess O'Toole, *Genealogy and Fiction in Hardy: Family Lineage and Narrative Lines*. (London: Macmillan, 1997) を参照のこと。
- (4) 本稿での引用は、Thomas Hardy, *Life's Little Ironies and A Changed Man*. (The New Wessex Edition, F. B. Pinion, ed.: London: Macmillan, 1977) に于いて、和訳は、井出弘之編訳『ノーディ短編集』(岩波書店、二〇〇〇)および深澤俊・内田能嗣監訳『トマス・ノーディ短編集 第三巻 人生の小さな皮肉』(大阪教育出版、二〇〇二)を参考とあわせていただいた。
- (5) この作品を執筆している頃、ノーディはハニカー夫人に誘われて、ロンドンでイブセンの「ロッダ・ガブラー」などを観劇している。Michael Millgate, *Thomas Hardy: A Biography Revisited*. (Oxford: Oxford University Press, 2004), 309-310 を参照のこと。
- (6) J. Hillis Miller, *Fiction and Repetition: Seven English Novels*. (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1982), Ch. 6 'The Well-Beloved: The Compulsion to Stop Repeating' を参照のこと。
- (7) Brady, *ibid.*, 98.
- (8) マイケル・シルゲイトは、作品が酷評されたことに耐えられなかったトルーとノーディを重ね合わせている。シルゲイトによれば、友人が語ったトルーの様子は、『ダーバヴィル家のテス』が書評で激しい非難を受けたノーディの心境と一致している。また、トニーが「悲観主義者」(一五)とこれづらぬ点で、ノーディと共通している。Millgate, *ibid.*, 314 を参照。
- (9) シラーは、前掲書において、『恋の霊』が兄・妹間の愛、ならしは恋人の中に潜む自分自身をナルシシズム的の愛するところ、テーマをシェアリーから受け継いでいると指摘している。
- (10) マイケル・ライアンは、「夢見る女」と『恋の霊』の共通点として、「満たされない欲望」や「芸術的創造」を挙げている。Michael Ryan, "One Name of Many Shapes: The Well-Beloved", *Critical Approaches to the Fiction of Thomas Hardy*, Dale Kramer ed. (London: Macmillan, 1979), 172.
- (11) エレイン・ショウオルターは、「一九世紀に見られる男女の精神異常の差異について、次のように指摘している。」「男女が共に似たような精神異常の兆候を見せている場合であっても、

- 精神医学は、高度に文明化された男性たちが、知的かつ経済的な圧迫を受けざるに生きて生じるイギリス人の病氣¹⁶、セクシュアリティや女性の本質的な性質から生じる女性の病氣とを区別してゐた¹⁷。Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness and English Culture, 1830-1980*. (London: Virago Press, 1987), 7を参照しよう。
- (12) Kristin Brady, "textual Hysteria: Hardy's Narrator on Women" in *The Sense of Sex: Feminist Perspectives of Hardy*, Margaret R. Higgonnet, ed. (Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 1993), 102.
- (13) ノーヴェは「夢見の女」のフロットの信憑性を高める点とを目的として、ヘラの症状が科学的にも立証されてゐるといふ点を、一八九六年版『ウェセックス物語』および一九一二年版『人生の小さな皮肉』の序文において強調してゐる。
- (14) Cynthia Eagle Russett, *Sexual Science: The Victorian Construction of Womanhood*. (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1989), 201.
- (15) Thomas Hardy, *The Life and Work of Thomas Hardy*, Michael Millgate, ed. (London: Macmillan, 1984), 240.
- (16) Brady, *The Short Stories*, 103. ノーヴェは「ノーヴェの」聖セバスティアヌス」(San Sebastian) という詩において「ナポレオン戦争の際に陵辱した娘の瞳が、後にまったく別の女性との間にもうけた子どもとの瞳とよく似てゐるといふ場面が登場するところも指摘してゐる。
- (17) Roger Robinson, 'heredity' in *Oxford Reader's Companion to Hardy*, Norman Page, ed. (Oxford: Oxford University Press, 2000), 185-186を参照しよう。
- (18) Ray, *ibid.*, 173-180.
- (19) 一九世紀の物理学者の大多数は、媒質としてのエーテルの存在を信じており、エーテルの一貫した特性を仮定することに奔走してゐた。エーテルは弾性固体であると主張する者がいれば、エーテルを均質な流体状の媒質と考える者もあり、エーテルの特性に対する見解は統一を見るのがなかった。一九世紀後半にジェームズ・クラーク・マクスウェル (James Clerk Maxwell) が電磁波の存在を理論的に予測し、ハインリヒ・ルドルフ・ヘルツ (Heinrich Rudolf Hertz) の実験によりその存在が確認されると、電磁波の媒体であるエーテルの存在も否定しがたいものと思われようになつた。なお、マクスウェルによる電磁気学の確立は一八六四年、ヘルツによる電磁波の存在確認は一八八八年である。ただし、一八八一年にアメリカで行われたマイケルソン・モーリーの実験 (Michelson-Morley experiment) では、エーテルの存在は確認できず、現在に至るまで、この実験は成功してゐない。また、一九〇五年、アインシュタインが特殊相対性理論を発表したことにより、現在では空間そのものが力や光の媒体であると考えられてゐる。一九世紀の物理学とエーテルに関しては、フロリアン・カジョリ著、武谷三男・一瀬幸雄訳『物理学の歴史(中)』(東京図書、一九六五) および P・M・ハ

ーマン著、杉山滋郎訳『物理学の誕生——エネルギー・力・物質の概念の発達史』（朝倉書店、一九九一）を参照。

- (20) 磁気という語からは、精神療法の一つであった「磁気術」が連想される。シュルトークとシュールによれば、「磁石」や「魅力」を意味する *magnes* という語は、「フェニキア語の *mag*（強くてがっしりした男性の意）と *raz*（流動して、他者に心理的苦痛を与えるものの意）に由来」しており、これにより「磁気術」という語が「潜在的に性的な意味合」をもつことは明確である。レオン・シュルトーク、レイモンド・ド・ソシュール著、長井真理訳『精神分析学の誕生——メスマルからフロイトへ』（サイエンス社、一九九四年）を参照。

(21) 当時の実験心理学は、ドイツの物理学者であり、精神世界に属する感覚と物理世界に属する刺激の関係を研究したグスタフ・フェヒナー (Gustav Fechner) による精神物理学や、

同じくドイツの生理学者・物理学者であるヘルマン・フオン・ヘルムホルツ (Hermann von Helmholtz) による感覚・知覚の研究および「エネルギー保存の法則」の一般化という貢献に因るところが大きい。梅本堯夫・大山正編著『心理学史への招待——現代心理学の背景』（サイエンス社、一九九四年）を参照。

- (22) ハーディは、一八九一年にショーペンハウアーの *Studies in Pessimism* を読んでおり、ショーペンハウアーを尊敬する哲学者の一人として挙げている。Harold Orel, ed. *Thomas Hardy's Personal Writings: Prefaces, Literary Opinions, Reminiscences*. (London: Macmillan, 1966), 58 を参照。なお、フロイトの登場はこの作品が出版された後のことになり、一九世紀末の精神医学では、シャルコーのヒステリー研究をはじめとした無意識界の解明が関心を集めるようになり、いわゆる力動精神医学の時代へと移行している。

(よしだ いくよ／博士後期課程)